

## 2018年2月下旬発売予定

# 2

[1968—73]  
〈革命〉  
—四つの光芒



### 目次

- i  
メッセージ／作品の前後／覚書／造反有利ということ／花柳の世界／いま水保：に——田中正造の叫び／四つの作品について／〈革命〉——四つの光芒／近松体験の収穫／革命伝説と現代／桃中軒牛右衛門／劇中劇という構造について／祭り——劇の原点／村と逆、村に——鉱毒事件と田中正造／ブリューゲルと魯迅
- ii  
私はどのようにして日本語を学んだか／演劇にとって性とはなにか——ある問答／「自明の論理」をこえるむずかしさ／賞について／劇作について／批評について／国家と犯罪または芸術／言葉・意味・文章／「観客」または「大衆」について／民衆・ヒーロー・劇／まぼろしの劇場／KABUKI／わたしの反歴史劇／舞台空間への接近／後家が狂わにゃ芝居じゃない／網走番外地・考
- iii  
松井須磨子と中山晋平／島村抱月と小山内薫／明色の生感覚——天草／松井須磨子——史談・私を魅了した女性／田中正造と足尾銅山／青鞥の女／心中——考／松井須磨子——「女優」
- iv  
作家の生と死／〈桜が咲いて、冬でした〉／〈サンバ〉と〈ヤソ〉／小説・八木柊一郎／久保田万太郎とわたし／一期一会／男の世界・女の世界／大いなる遺産——久保栄・人と芸術／〈ウェスカー68〉について／ウェスカー68を——なぜ？／ウェスカーがのこしたもの／木村光一論／俳優石立鉄男／玲瓏玉のごとし——菅野忠彦／饒舌な世界を秘めた人——坂口芳貞／太地喜和子／夜の牙——李礼仙
- v  
オレの新宿——シャツとボタン／アクション・オン・ステージ／解説（『現代日本戯曲大系』第3巻）／夢と現実——わたしの場合／原点としての八月／消えたセリフ
- vi  
独自の角度からの魯迅への接近——尾崎秀樹著『魯迅との対話』／切断された土着への回路——秋元松代著『かさぶた式部考・常陸坊海尊』／島・比喩と実在の間——安部公房『未必の故意』（俳優座）

## 2018年5月下旬発売予定

# 3

[1974—81]  
中国と滔天と私



### 目次

- i  
兵士たちの物語／中国と滔天と私／あとがき／断片二、三／日記から／国境の長いトンネル／覚書——補遺／そこからの出発、そこへの回路／注釈——二、三／「ダン吉」が選んだ冒険／マンガと実在の接点
- ii  
トンネルを過ぎれば雪国か？／革命の演劇と演劇の革命／新劇・その現在と未来／形姿と律／五体ために裂く
- iii  
亡国に至るを知らざれば即ち亡国——谷中村と三里塚／孫文と宮崎滔天／滔天とわたし／魯迅を読む／寒村さんのこと二、三／鹿鳴館と伊藤博文／昌平さんとの六年間／裏がえしの祝祭劇——ええじゃないか／こわれた時計のこと
- iv  
私小説・木下順二／巨大な矛盾律としての存在／一翻訳者としての駄弁／老舎のことなど／勉さんの芝居／父は永遠に悲壯である／運河のほとりで／女の中の女——新橋耐子／豪徳さんの情景——坂本長利／悼——小菊米現
- v  
フェアプレイはまだ早い／サクラサクラは死のサイン／勝馬投票初陣始末／悪魔はどこだ？／ホシはどこだ？／地下室のメロディー／十石峠にまぼろしを見た／WHAT DO YOU WANT？／ここまでの道／つきまとう影法師／あまいな記憶／ゴリラのおはなし／風景としての寺／8・15と私の原理／南島小景／チャイルド・ハロルドの旅／三十一年ぶりの北京／わが日録／エピソード／北京の秋／もう一枚の地図
- vi  
偉大な革命家の壮大な生涯——『宮崎滔天全集』全五巻／転形期の肉体——花田清輝『ものみな歌でおわる』（木六会）

## 2018年8月下旬発売予定

# 4

[1982—88]  
時を曳く



### 目次

- i  
雪国——小説と劇との間／山河慟哭／ゾラを読む／彼らのあいだの屍／漱石——わたしの場合／男と女たちの物語／時代へのヒステリー／敗戦未然／叫び——ピアフの歌声／残侠の人／『明治の檻』——反近代への出発点／四十年目の夏——『ザ・パイロット』のこと／『ザ・パイロット』——未然形の物語として／山頭火への接近／作者としては／もうひとつの元禄
- ii  
高校演劇も演劇である／演劇における境界の意味／笑いと諷刺／多幕物を書く
- iii  
大正という時代／ルイズさんの事／私の山頭火体験
- iv  
水上勉＋木村光一／林黒土小論／魔術の人／見る——見られる／時代の花——片岡孝夫／星から来た人——金内喜久夫／写真の果てに——杉村春子／30.3センチメートル——織田音也
- v  
諫早ひとり歩き／九州に酔う／海の見える風景／ごく私的なこといくつか／異形の者／合津の酒に酔う／生きとし生けるもの声／あの五年間のこと——「選考合評」一九六八～七二／ひと夏の夢ではなく／この手でわが青春の記念碑を——校史編纂についてのアピール／七年で消えた学校のこと／北京残影／追跡幻想／紹興にて／時を曳く
- vi  
活気あふれる『どん底』の住人たち——B.A.ギリャロフスキー著『帝政末期のモスクワ』  
〈補遺〉  
横光利一論／『赤い靴』を観て／西遊雑記一～四  
〈年譜・目録〉